

Title	第12講：あとがき
Sub Title	
Author	石川, 史郎(Ishikawa, Shirō)
Publisher	
Publication year	2018
Jtitle	理系の西洋哲学史；哲学は進歩したか? (2018. 6) ,p.287- 300
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学理工学部大学院講義ノート
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO52003003-00000000-0287

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第 12 講

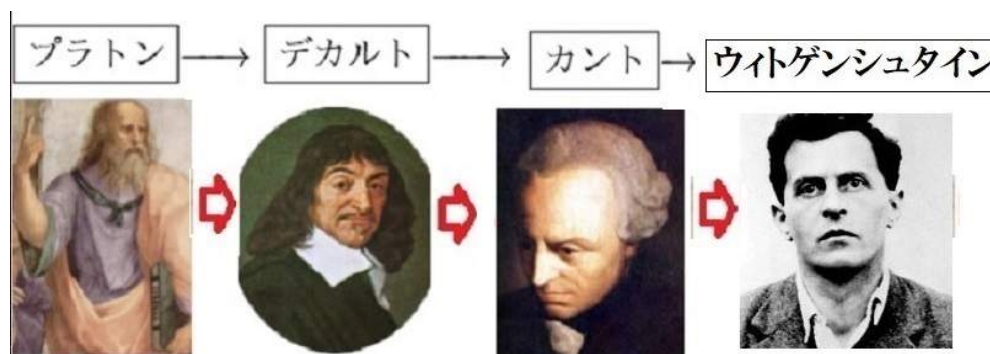
あしがき

「理系の西洋哲学史」 目次; 他

12.1 当然のことであるが、文学部哲学科の哲学は文芸的

著者は理系の住人で、その世界では、「哲学」という言葉は一種の蔑みのニュアンスで使われることもある。つまり、

(A₁) 西洋哲学の本流 [プラトン (イデア論) → デカルト (方法序説) → カント (純理) → ウィトゲンシュタイン (論考)] は、真理とは一切関係なくて、非生産的な自己言及的トリックの言葉遊びを楽しんでいるだけである。



歴史的に高く評価されている部分があるとしたら、純粹に学問としてではなくて、キリスト教を取り巻く環境の中での社会的評価によることが大である。

西洋哲学史 (世界記述) に教養 (雑談ネタ) 以外のものを期待しても無駄

が大方の理系の見方だろう。

しかし、世界記述の哲学 (二元論的観念論の系譜)[プラトン (イデア論) → デカルト (方法序説) → カント (純理) → ウィトゲンシュタイン (論考)] は人々の心を動かしたという実績がある。というか、これほど影響力・実績のある学問は他にない。また、文芸的な気分を楽しむ文化が

面白いことも確かなことと思う。しかし、自分には向かない分野として、著者は「哲学」にはなるべく近づかないようにしてきたつもりである。それにしても、

(A₂) 理系が文学部哲学科の「(文芸的) 時空」とか「(実験無しの) 認識論のような人間が入り込むオカルト的二元論」とかの議論に興味を持ったり、文学部哲学科が(数物の訓練も受けずに)「数理論理学」とか「相対性理論・量子力学」とか「確率」とか、また(実験もしないで)「認知科学・脳科学」等に興味を持ったりとか、もちろん、多くは、「趣味・教養・雑談のネタ」という感覚で哲学に接しているわけで、その趣味に水を差すつもりはない。ただ、極一部とは言え、

そこに趣味以上のものを期待しているとしたら、無謀すぎる

と常識人なら思うだろう。

12.2 量子言語は二元論的観念論の唯一の科学的成功例

「西洋哲学史」と言っても、様々であるが、

本講では、二元論・観念論に限定して考察した

この分野は 2500 年以上もの失敗の連鎖の歴史があるが、一応、西洋哲学の本流の歴史と断言していいだろう。そうだとすると、著者は

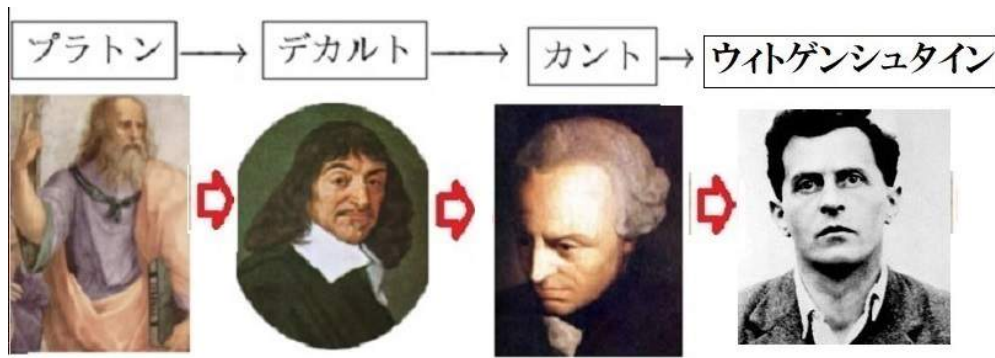
(B₁) 哲学は、「千三つ」の学問である

と思っている。千(否、万とか億とか)に三つくらいしかうまく行かない学問なのだと思う。上の(A₂)のような的外れと思える挑戦の中から一つでも成功すればよい。否、成功しなくても挑戦し続けるのが哲学なのだと思う。

さて、著者は、量子基礎論の根本問題(ボーア=アインシュタイン論争、量子力学の解釈問題)の一つの解決法として、「量子言語」という言語を提案した。そして、これが二元論的観念論(認識論のように人間が入り込む二元論)の唯一の科学的成功例であることを確信した。

そして、この観点から、本書では以下のような議論をした。

(B₂) 物理学は進歩・発展してきたが、純文学はどうだかわからない。流行・ファッションだけだったのかもしれない。それでは、西洋哲学の本流を



と考えたとき、西洋哲学は進歩・発展してきたのだろうか？ または、「進歩・発展」の尺度は何か？ もし進歩・発展してきたとしたら、一体何を目標として進歩・発展してきたのだろうか？

である。二元論的観念論の中で確固たる理論は唯一量子言語だけなのだから、

(C₁) 世界記述の哲学 [プラトン (イデア論)→ デカルト (方法序説)→ カント (純理)] は量子言語を目指して進歩してきた

とか、同じ意味で、

(C₂) 哲学者たちの目的は二元論的観念論の中に確固たる理論を構築することである

とかと主張したくなる。

すなわち、次を主張したくなる。

主張 12.1. [世界記述史の中での「量子言語の位置づけ」(cf. 文献 [KOARA 2018; コペン] 第 1 講)]

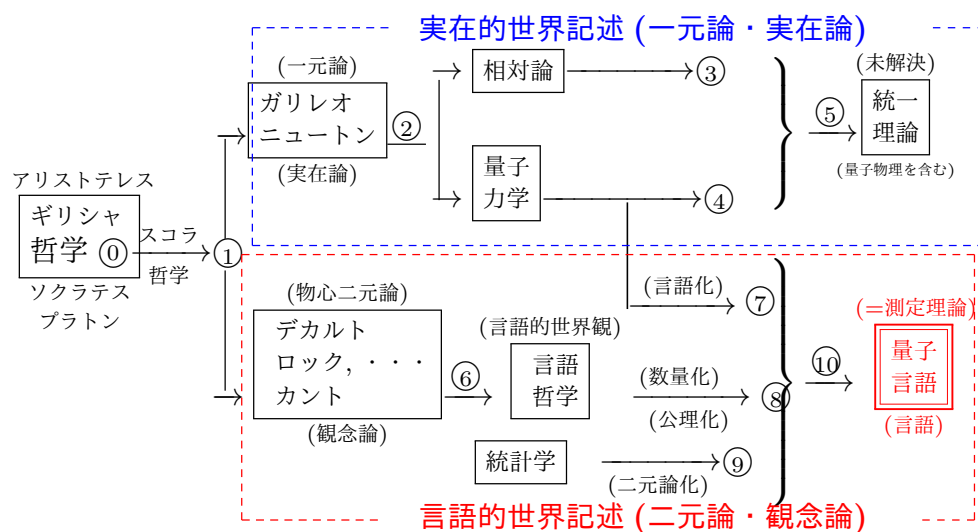
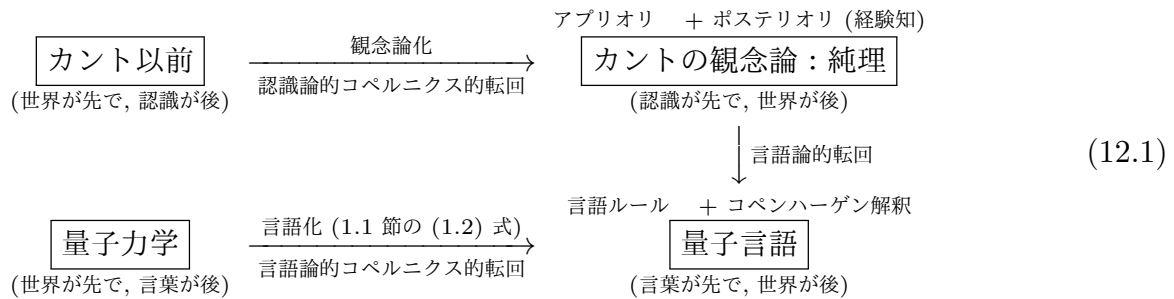


図 1.2 [世界記述史の中での「量子言語の位置づけ」(主張 1.2)]

(注；カント以前の物心二元論も物理以外のものという意味で一括して観念論に属するとした；9.1 節 [J. ロック] 参照)

ここで、言語的世界記述内の $[\longrightarrow]$ は $[\xrightarrow[\text{という意味の進歩}]{\text{量子言語に近づく}}]$ と解釈する。

結局、総括 11.2 で示したように、次の図式を得たことになる。



そうならば、**コペルニクスの転回** とは、

- 实在論から観念論 (or, 量子言語) を作り出す操作

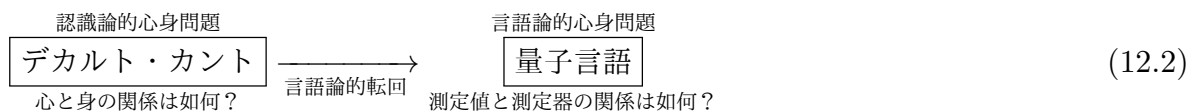
である。

著者は哲学・西洋哲学史の専門家ではないが、上の図 1.2[世界記述史の中での「量子言語の位置づけ」(主張 1.2)] を主張してしまうと、

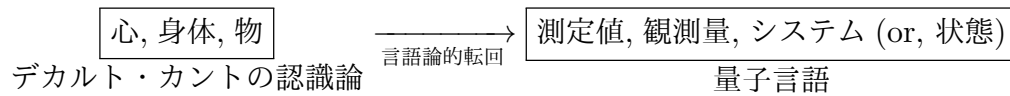
この主張に都合の良いように、
「西洋哲学史」という題名でフィクションを書きたくなる

ものである。

さて、 $[A \xrightarrow[\text{進歩}]{\longrightarrow} B]$ が完璧に機能しているとするならば、原理的には「Aは無くてもBがあればよい」わけで、たとえば、「原理的にはニュートン力学が無くても相対論があればよい」と考えることもできる。そうならば、文芸的要素を一切排除した立場からならば、「量子言語があればデカルト＝カントの認識論は不要」と考えることには一理ある。また、心身問題(「心」と「身体」は如何にして関係し合っているのか?)は文芸的な問題ではないのだから、



と言う進歩の中で、心身問題を量子言語の枠組みで答えることが自然と考える。すなわち、



なのだから、しかも、「測定値, 観測量, システム (or, 状態)」の関係は言語ルール 1(測定) で完全に記述されているのだから、また、因果関係は言語ルール 2(因果関係) で完全に記述されているのだから、そうならば、次の同値関係を主張したくなる。

11.4 節で議論したように、

- 二元論的観念論を究める
- ⇔ 量子言語を提案する
 - ⇔ 言語ルール 1(測定) と言語ルール 2(因果関係) を提案する
 - ⇔ 心身問題と因果問題を解く
 - ⇔ 諸科学を記述する言語を提案する (cf. 主張 1.1) (12.3)

と考える。

哲学は文芸的には様々な観点があるわけで、そしてこの「様々さ」こそ文学部哲学科の哲学の魅力なのかもしれない。しかし、文芸を排除した立場からは、結局、主張 D12.1 主張の世界記述の哲学 [⑩ → ① → ⑥ → ⑧] は、すなわち、



は、(12.3) 式により、

二元論的観念論を究めるための歴史だった

すなわち、

- 「アイデア」、「神」、「存在」、「論理」、「心」等は哲学の主要テーマではない。「哲学の

主要テーマは『二元論』である」と考えれば、西洋哲学史【⑩ - ① - ⑥ - ⑧】に「進歩」というストーリーを導入できる。

と結論したい。そして、その到達点の量子言語は諸科学を記述するための言語なのだから 2500 年以上の労苦も報われたと思いたい。

そうだとすると、デカルト、..., カント、ウィトゲンシュタインたちは暗中模索のままで前進と信じている方向に進んだわけで、

(D) その場の思い付きの「二元論・観念論のモデルチェンジ」でも、天才たちの思い付きなので、結果的には、二元論・観念論の意味の明確化になった

つまり、

(E₁) メチャクチャにバットを振っても、天才ならばホームランになる

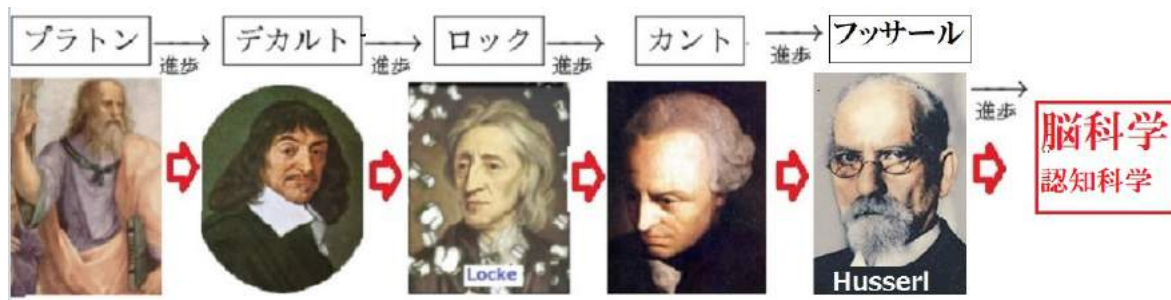
ということなのか、または

(E₂) 「メチャクチャにバットを振った」としか、(著者のような) 凡人には見えない

ということなのだろう。

次の二つを **不採用** とする：哲学の本流 (二元論的観念論) の興味は「心・脳」ではないからである。

(#1) カントの「コペルニクスの転回 (観念論の発見)」が台無しになってしまうので



(#2) カントのいない西洋哲学史などあり得ない ので



もちろん、上の **不採用** は本書の観点であって、別の意見があってもよい。哲学は、一般の哲学愛好家の支持が無ければ、存在意義がないという考えも一理ある。現時点で一番有望な学問に近づきたいと多くの哲学愛好家が考えても不思議でないし、そのための哲学を提供しようとする哲学者がいても非難されることではない。

さらに言うならば、次の「最大の哲学・科学論争」に一貫性を持たすためにも哲学のテーマは言語であってほしい。

表 1.1：最大の哲学・科学論争 [実在的世界記述 vs. 言語的世界記述](主張 1.5)

論争 \ [実] vs. [言]	実在的世界記述 (一元論・実在論)	言語的世界記述 (二元論・観念論)
㉑: 運動	ヘラクレイトス	パルメニデス
㉒: 古代ギリシャ	アリストテレス	プラトン
㉓: 普遍論争	唯名論 (オッカム)	実念論 (アンセルムス)
㉔: 時空	ニュートン	ライプニッツ
㉕: 量子力学	アインシュタイン	ボーア

㉑は著者のフィクション, ㉓は論争というより混迷. ㉔はライプニッツ＝クラークの往復書簡 (cf. 9.4 節), ㉕はボーア＝アインシュタイン論争. 量子言語はボーア＝アインシュタイン論争を解決するために提唱された (cf. 文献 [KOARA 2018; コペン] 第四講)*¹

すなわち, 西洋哲学史 (世界記述の部分) の本筋は,

- 上表のように, [実在論 vs. 観念論] を主題とするストーリーである

と単純に総括したい。

もちろん, 次が大人の意見だろう。

- 二元論的観念論 (プラトン, デカルト, ロック, バークリー, カント) の価値の 99 パーセントはキリスト教を取り巻く文芸的な部分にある. 人生訓を説く前の小話だったはずなのに, 宗教や人生訓とまったく関係しない量子言語を持ってきて, 何かを主張しても誰も耳を貸さないだろう。

♣ そもそも, 量子言語 ([KOARA 2018; コペン]) など, 理系大学院でも読めるのは極一部だろう

と言われれば, そうかもしれない。

- 哲学はインテリ的な雰囲気を楽しむ文芸で, 「難しい」と言いながらも誰もがそれなりに楽しめる題材でなければならない. 哲学は一般大衆に直接的に受け入れられることが宿命つけられているのだから, その先を突き詰めると数式が出てくる予感があるならない. 哲学のマーケットは一般大衆であって, 彼らがカントより脳科学とか AI についての雑談を好むというならば, それ向けの哲学的文芸作品を用意する哲学者がいてもおかしい話ではない. 文芸的哲学がマーケットを意識して悪いわけがない. と言うより, 意識しないとしたら, どうかしている。

ひとつの学問が 2500 年以上も継続することは大変なことで、

哲学の真の目的は、生き延びること

なのかもしれないからである。生き延びるためなら、神学の侍女でも科学の侍女でも何でもなります, が本音かもしれない。

その通りと思うし, そんなことはわかっているが一応, 理系の立場から量子言語を主張してみたかっただけである. 折角、諸科学への優越性を量子言語 (諸科学の言語) は主張しているのだから。

何度も述べているように,

本講では, 二元論・観念論に限定して, 理系の観点から「西洋哲学史」を考察した

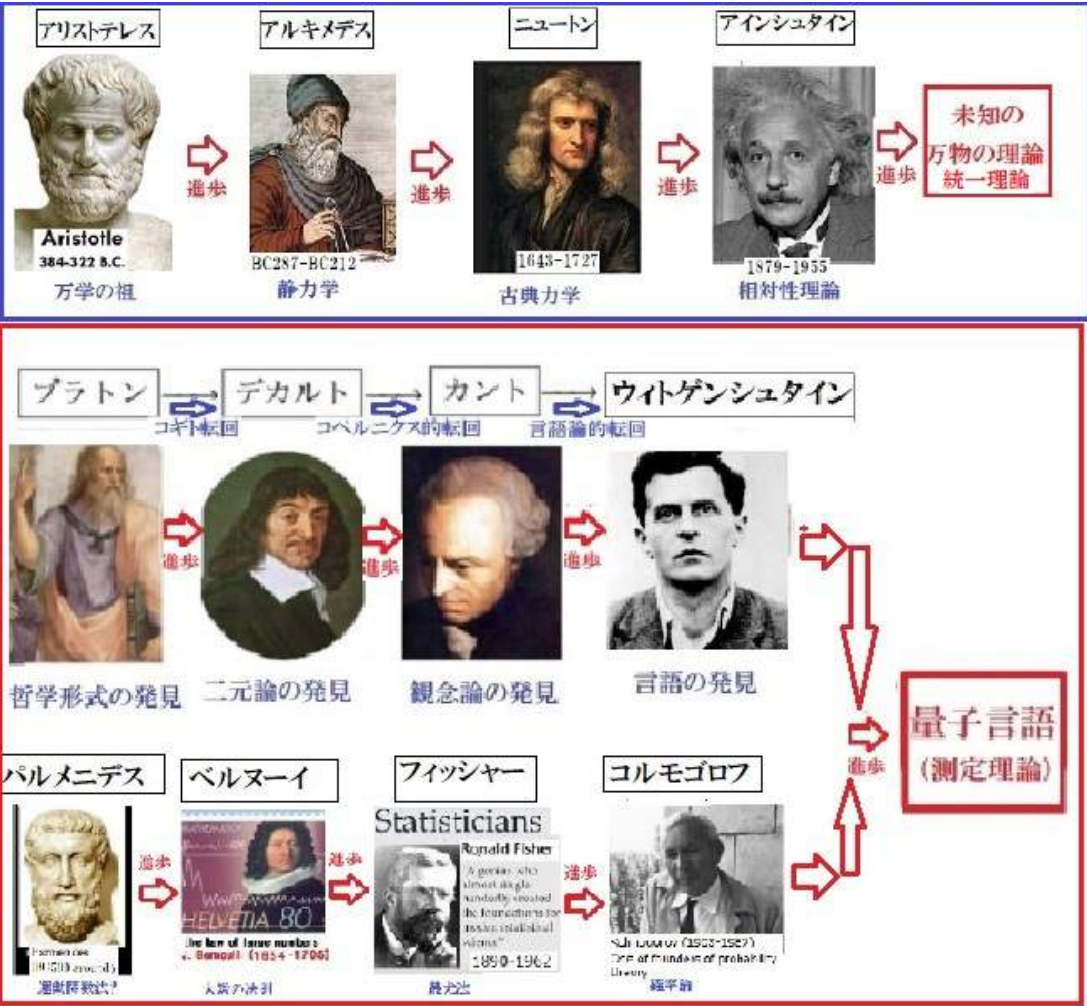
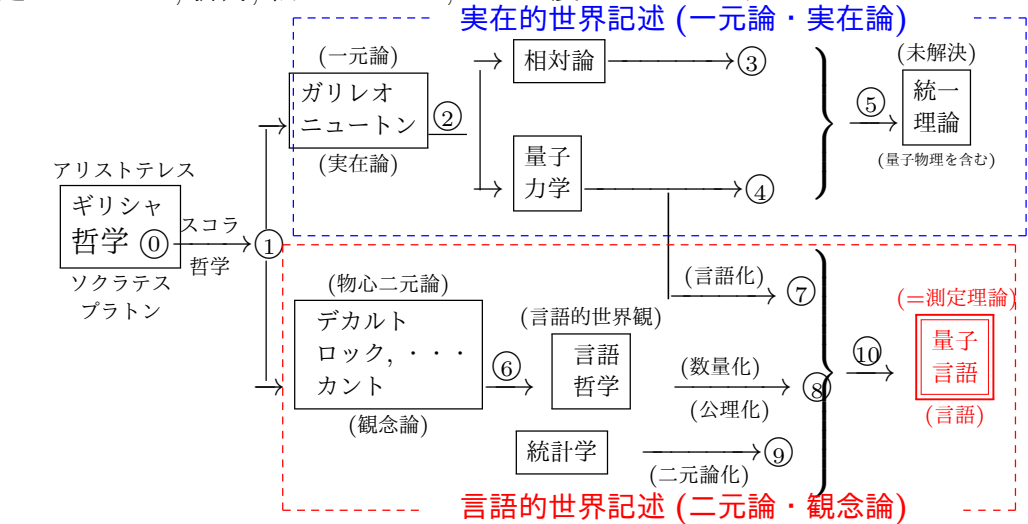
そして,

その部分に限れば、哲学は進歩してきたと結論できる

と主張した.

12.3 最後のまとめ

繰り返しになるが、折角、絵があるので、もう一度まとめておく。



物理 (実在的世界記述) のところでは, マックスウェル (電磁気学) は入れるべきだったが, 定員が 4 人ということで割愛した. 統計の部分は, 天才の独壇場というわけではないので, パスカル, ラプラス, ベイズ, カルマン等を入れてもよかった. コペンハーゲン学派以外でも, パルメニデスとコルモゴロフはコペンハーゲン解釈「測定は一回だけ」を直感していたというのが本書の主張なので, この二人は外せない. また, フィッシャーの最尤法はほぼ言語ルール 1 と同じなのでフィッシャーも外せない. ベルヌーイは著者の好みで選んだが, ベイズでもカルマンでもよかった ([KOARA 2018; コペン]).

12.4 最後に

哲学者 (哲学愛好家) ならば誰でも「マイ哲学」を持っているかもしれない. 著者としては自己満足に終わらないためにも, 並の「マイ哲学」と線引きするために, 「マイ哲学」で西洋哲学史を書き換えるチャレンジをしたかったのかもしれない. 「量子力学の哲学 ($\approx$ 量子基礎論)」という分野が中途半端で亜流のような気がしていたので, 「本当の哲学」の分野に乗り込んでみたかったという思いもあった.

理工学部の大学院の講義の中で, 大学初年度の学生にも伝わる部分だけを数式を使わずに著したわけであるが, 本書は意外と容易に書けた. たとえば,

対応 12.2. 「哲学の言葉」 $\longleftrightarrow$ [量子言語の言葉] には次のような対応がある:

- (F₁) 「(パルメニデスの) 一しかない」
 $\longleftrightarrow$ [測定は一回だけ], [確率空間は一つだけ; コルモゴロフ],
 - (F₂) 「(ゼノンの) 運動のパラドックス」 $\longleftrightarrow$ [旅人算に形而上学性],
 - (F₃) 「(アリストテレスの) 三段論法」 $\longleftrightarrow$ [量子力学では三段論法は成立しない],
 - (F₄) 「(アウグスティヌスの) 現在しかない」 $\longleftrightarrow$ [時制は存在しない],
 - (F₅) 「(デカルトの) 我」 $\longleftrightarrow$ [測定者],
 - (F₆) 「(ジョン・ロックの) 第二性質」 $\longleftrightarrow$ [観測量],
 - (F₇) 「(バークリーの) 存在するとは知覚されること」
 $\longleftrightarrow$ [[「月は見ていなくても存在する; アインシュタイン」の逆],
 - (F₈) 「(カントの) コペルニクスの転回」 $\longleftrightarrow$ [量子力学から量子言語へ],
 - (F₉) 「(ウィトゲンシュタインの) 語りえぬもの」 $\longleftrightarrow$ [反コペンハーゲン解釈的命題],
 - (F₁₀) 「(ラッセルの) 世界五分前仮説」 $\longleftrightarrow$ [測定者の時間はない. 時制の非存在]
- 等.

これらの対応は量子言語の構築の際に考え尽くしたアイデアだったのだから, 本書の作成に

は、西洋哲学史の中にこれらを張り付けばよいだけだった。

今、読み返してみると、出来不出来は別にして、旧来の「西洋哲学史」に新風を吹き込んで、

逆算に徹した新しい形の西洋哲学史

が書けたと自負できる。文芸的な「西洋哲学史 (by バートランド・ラッセル)」とか寓話的な「ソフィーの世界 (by ヨースタイン・ゴルデル)」など「文系の西洋哲学史」とは一線を画す「理系の西洋哲学史」が書けたと思う。

P.S. さて、ここまでだったら、誰でも (中学生でも) 読める「遊び」である。もちろん、「遊び」で終えるのもよいだろう、しかし、本書は「理系の西洋哲学史」なので、ここからがスタートである。

本書は、量子言語から逆算して見える景色を書いただけ

と言っているのだから「その逆算」を確かめなければ、大学院の講義を受けたとは言えないだろう。大学の理系卒相当の数物の実力を有している読者は文献 [15](or [KOARA 2018; コペン]) を読んで量子言語を素早くマスターして、本書に書かれている気分的な説明を可能な限り量子言語で言い換えて明確に理解してもらいたい。本書だけではいかにも上っ面だけという印象で気が引けている。形而上学 ($\approx$ 観念論) は科学のように実験検証によって理論が更新・改変されることがないので、形而上学との付き合い方はいつも警戒しなければならない。特に、二元論という『我 (=測定者)』を内蔵した理論は 2500 年以上の失敗の連鎖という歴史があるわけで、十分な警戒が必要である。

量子言語 (という二元論的形而上学) は「役に立つ奇跡の哲学」である。

しかし、それでも十分に懐疑的であるべきで、今後の検討・吟味を期待したい。

本書に弱点があるとしたら、著者の西洋哲学史に関する知識が貧弱なことであるが、それにも拘わらず公表に踏み切ったのは、読者に次の問題に挑戦することを勧めるためである。 どうか

本書は、読者が下記の問題に挑戦することを促すために書かれた

と言った方が正確だろう。

問題 12.3. : 著者が気になっていること

- 量子言語は二元論的観念論の理論として最良か？ 量子言語と同等もしくはこれ以上の理論があるか？ または、量子言語は本質的な意味で改良可能か？
- 「量子言語は、諸科学を記述する言語である (cf. 主張 1.1)」は科学史上最大級の主張であるべきである。それなのに、相対性理論を記述できないのは情けないのでは？ と言われると、著者の信念も揺らぐ。そこで、本書では、この主張を「精神(指針・宣言)」として曖昧にした部分もある。多少の例外があっても宣言したいわけで、著者が自信をもてるような言い方・方便を考えてもらいたい。
- 別の最新哲学理論から逆算した「西洋哲学史」を提示して、本書の提案と比較・検討せよ。
- 脳科学がいくら発展しても、量子言語で記述できない命題 (=”反コペンハーゲン解釈的命題”たとえば、コギト命題、クオリア問題) はお手上げだろう (cf. 注釈 8.6)。そうならば、そのような命題を集めて、これらと自己言及型の命題の関係が知りたい。すくなくとも、反コペンハーゲン解釈的命題たちの分類をしたい。水槽脳とか世界五分前仮説とかを収集して楽しむのを否定するつもりはないが、もうそろそろ収集以上のことをしたい。
- 数学・理論物理学は宇宙共通の現代の神学であるとして、それならば、量子言語も宇宙共通か、または人間共通か？ 具体的に言うと、2045 年に AI により各学問でシンギュラリティが起こると予想されている。このときに、[数学 v.s. AI], [理論物理 v.s. AI], [量子言語 v.s. AI] のそれぞれはどうなるのだろうか？
- 本書は全体のストーリーとしてはかなり自信がある。旧来の「西洋哲学史」のマンネリを打破したと自負できる。しかし、西洋哲学史の素養が著者にもうすこしあったら、かなりあるであろう小さな間違いを回避できたろうに、という思いがある。著者より哲学の素養が格段に上という読者は多数いると思う。そういう読者には、本書の全面的な改変版にチャレンジしてもらいたい。上の対応 12.2;(F₁)–(F₁₀) は必須で固定したとして、登場する哲学者たちの仕事やキャラクターの設定の取捨選択の自由度はかなりあるので、対応 12.2 の張り付け方によっては、本書とはかなり異なる「西洋哲学史」が書ける可能性もあって面白い。可能ならば英語版が好ましいが当面は日本語版でも可だろう。「英語版」と言ったのは、著者が適えられていない夢 (B. ラッセル並) を、読者の誰かに実現して (すくなくとも、目標にして) もらいたいからである (cf. [17] KSTS-RR-17/004)。ラッセル一強が続いていたのでは「**哲学は進歩しない**」ことになってしまうと思うからである。

